

念仏者は、無碍の一道なり。そのいわれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪悪も業報を感ずることあたわず、諸善もおよぶことなきゆえに、無碍の一道なりと云々

南第3組 光福寺住職

第7章「無碍の一道とは、 私が無碍になるのではない」

金石 晃陽

text by Kouyou Kanaishi

この第7章は、一切の衆生に「往生の一道」を開く、弥陀の御もよおし（第6章）であるところの無碍光の用きが、どこまでも「念仏の法」として讃えられている章である。

宗祖の90年のご生涯は、「生死の苦海ほとりなし ひさしくしずめるわれらをば 弥陀弘誓のふねのみぞ のせてかならずわたしける」と和讃されたように、自らの人生を「苦海（有碍）」い譬えられた。宗祖の当時は、度重なる動乱と天変地異による人々の苦難と恐怖と不安と罪悪感と不信感と絶望感。その人々と共にあって、「久しく沈める」「われら」と言い切られた。また当時の仏教界は、「かなしきかなや道俗の 良日吉日えらばしめ 天神地祇をあがめつつ ト占祭祀つとめとす」の和讃のように、今日の宗教状況と何ら変わりはなかったであろう。しかし、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」との師法然上人の仰せによって、弥陀の本願に目覚めることのできた救いの感動を「弥陀弘誓のふね（無碍）のみぞ のせてかならずわたしける」と詠われた。

宗祖は、「ただ念仏して」との法然上人の仰せを、「大行」と仰ぎ、「大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり」（行巻）と頂かれた。大行とは、如来の行であって、人間の行では決してない。どこまでも、行者にとっては、「非行・非善」（第8章）なのである。

この「無碍光」について、曇鸞は、『論註』において、大切な問答を出され

ている。

「無碍光如来の光明無量にして、十方国土を照らしたもうに障碍する所なし」と言われるが、この世界の衆生は、光照を蒙ったとはいえない。もし、照らさない所があるなら、「有碍」であって、「無碍光」とは言えないのではないかと問い、「碍」は衆生に属するのであって、仏の光明に「碍」があるのではない。あたかも、すべてに注ぐ大雨も、頑石だけは潤うことがないのと同じで、どこまでも、「碍」は、衆生の問題であることを確認されている。

「無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり」（総序）。「碍」を自己の内に見い出せないのを「無明の闇」といい、「碍」を常に自己の外に見るのを「外道」といわれるのであろう。

光との出遇いは、光を見ることではない。自己の闇に目覚めることが、光との出遇いであるように、無碍光との出遇いは、私が無碍になることではない。徹底して、自己の有碍性に目覚め続けていくことが、無碍光を証しすることになる。その内なる有碍の無自覚さが、その投影として、天神・地祇を生み出し、吉凶禍福をもたらす存在として縛られていく。

釈尊の成道の直前に、「降魔」がある。悪魔（マーラ=いのちを殺すもの・菩提を障げるものの意）が、三人の美女や歌舞音曲をもって誘惑したり、大勢の悪魔や多くの軍勢をもって脅かし、成道を妨げようとするが、「降魔」、その魔を降伏せしめた。その降魔の第一声は、「おお無明よ、魔は内にあり」として、仏伝の「八相成道」は今に伝えている。末法の時・五濁の世・凡夫の身を生きる者にとって、一切が「有碍」としてしか実感できない。「ただ念仏」とは、その「有碍」の身にまで、一筋に「如来なる無碍光」が届き、照らされていた自己に目覚めることができた感動こそ「無碍の一道」であろう。

「無碍は、謂く、生死即涅槃と知るなり」（論註）。法の中（涅槃界中）にありながらも、内なる碍（分別と疑い）によって作られた、虚構なる狭い世界に閉じこもっている自己（生死）を自覚させ、本来の世界（涅槃）に呼び返す、それが無碍光の用きなのであろう。